

# 〈原爆の図アメリカ展〉が成功裡に閉幕しました

～12月16日ニューヨーク展の様子のご報告～ 小寺隆幸（原爆の図丸木美術館理事長）



「原爆の図」アメリカ展は、2000名の市民と70団体の熱い思いと募金に支えられ、6月～8月アメリカン大学（ワシントンDC）、9月～10月ボストン大学、11月～12月パイオニア・ワークス（ニューヨーク）で開催された。ニューヨークでは約4000名が見学、展覧会の内容は現代アートの街ブルックリンの年間ベスト2に選ばれた。皆様のご支援に心からお礼申し上げます。

## 原爆の図に向き合った高校生 ヒバクシャ・ストーリーズの取り組み

ヒバクシャ・ストーリーズは、当時国連軍縮局軍縮教育コンサルタントとして度々来日して被爆者と深く交流していたキャサリン・サリヴァンさんが、元高校教師ロバート・クルンキストさんと共に2008年にユース・アーツ・ニューヨークを母体に創設したNGOである。その目的は、「核兵器のない世界を構築するために高校生や大学生に広島と長崎への原爆投下の遺産を渡すこと」である。その中で核兵器とそれに近い原子力発電・核廃棄物・核燃料サイクルについての理解を促すことも位置づけられている。そして「芸術、科学、文化を活用した軍縮教育への新しいアプローチ」として「芸術家と学生を結びつけ、直接核軍縮のための運動に貢献するとともに、多世代の芸術コミュニティを開発すること」もめざされている。

それ以来8年間、春・冬の2回、アメリカ大陸や日本からヒバクシャ数名を招き、ニューヨークとその近郊の学校を訪問し、生徒と対話する取り組みを続けてきた。8年間で3万名の生徒たちが被爆者と対話してきた。残念ながら被爆者の高齢化で2015年で終了となった。（HibakushaStoriesで検索するとウェブサイトが見つかる。そこに日本語で目的や内容が書かれており参照してほしい。）

サリヴァンさんは2011年に丸木美術館を訪問、今回の原爆の図ニューヨーク展の実現にも尽力してくださり、さらに「原爆の図」の見学と合わせた5時間のワークショップを企画しニューヨークの高校に呼びかけてくださった。それに対して7校の教師が応え、授業として実施したのである。多くは歴史の授業として、担当の先生の判断で実現したという。バスは教育委員会が提供、子どもたちの参加費は昼食を含め一人10ドルである。私は12月16日と17日、最後の2回に立ち会うことができた。16日のブルックリンの高校の様子を紹介しよう。



2クラス合同で16～17歳の生徒48名の歴史の授業として行われた。まずサリヴァンさん（写真右端）が生徒とやり取りしながら核兵器や放射線について考え、音によるデモンストレーションを行った。第二次大戦で使用された全火力を一つのBB弾の音で表すと、現在ある核兵器の総エネルギーは数千発。それをダダダダという連射音で表すのを聞いて、生徒は「どのくらいの命が奪われるのかと思った」「終わらない気がした」などと語

った。サリヴァンさんは「核を持つことは自分が大切だと思えることが一瞬にして奪われること。核の開発にはたくさんの資金や時間が奪われる。世界にはたくさん問題があるのにそれでよいのか。だから核は現在の問題であり、社会の在り方や自分の生き方が問われている」と語りかけた。

次に山下泰昭さんが証言された。長崎で6歳で被爆したときの様子、その後も病気がちで、高校を出ても働き口がなく、原爆病院で働いた時に白血病で亡くなった青年を見て自分もそうなるかと思ったこと、差別されるので被爆者とは言えず、68年にメキシコへ移住したことなど静かに語られた。95年のフランス核実験がきっかけで被爆体験を話し始めた。話すことはと



ても苦しかったが、話し終わって心が軽くなることも感じた。被爆者が伝えなければ伝わらない。美しい人生を核が奪わないように他の人にも伝えてほしい。誰かが誰かに伝えて行けばその力が大きく

なって世界は変わるかもしれないと結んだ。

生徒からは「どのような差別があったのか?」「今はどういう状況か?」など質問が相次ぎ、丁寧に答えられていた。また山下さんの話を聴きながらその場で印象を絵で表現した生徒がその絵を山下さんに手渡したことも感動的だった。

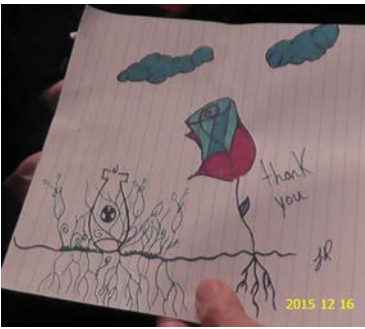
次に私が丸木夫妻が広島で見たこと、4年後に原爆の図を描こうとしたときの想い、その後

の夫妻と原爆の図の歩みを語った。そして生徒は隣の展示室に入った。

高校生たちは広い空間で静かに原爆の図に向き合った。真剣に見つめるまなざし。床に座り込み書き留める生徒、その場で詩をつくる生徒、絵で印象を表現する生徒、hopeの文字でノートを埋め尽くす生徒(彼は後で、その紙に全員にサイン

してもらい、私にプレゼントしてくれた。)絵を見て感じたことをそれぞれが表現しようとしていた。

その後の話し合いで、彼らは口々に語った。「女の子と赤ちゃんに希望を見いだした。」「核や差別はこのままでは解決しない。大切なのは知ること。リスペクトが大事だ。」「この判断は正しかったのか。これが自分の国なのか。こんなにも犠牲が必要だったのか。これが望んでいた結果なのか。」「核兵器は悪魔の兵器だ。罪もない人たちにこういう兵器を使うこと、まだ持っていることが信じられない。せめて使われないことを願う。人だけでなくどんな生き物も核兵器の苦しみを味わってはいけない。」「言葉でこれを表現できるのか。人道に反する。この記憶を留めなければならない。」「こ



れを見るだけで世界は変えられるのではないか。これを見ても世界を変えたいとは思わないのだろうか。私はこれをきっかけに変えていきたい。」

「原爆の図」をアメリカの若者たちはストレートに受け止めた。この絵から自分の国や歴史を見つめようとし、人間の尊厳について考え、希望を読み取り、世界を変えていきたいと感じた。彼らの多くはアフリカン・アメリカンとして差別や経済的困難の中で生きているので、より深く自分の問題としてとらえたのかもしれない。

午後、サリヴァンさんは原発と原爆のつながりを 3 分間でわかりやすく伝えようと高校生に宣言。皆が静まり返る中でぴったり話し終えると一斉に拍手。関心を引き付ける優れたファシリテーターぶりだった。

その後、隣の部屋の原爆の遺品やニューヨーク在住のダンサー、尾竹永子さんの写真に向き合った。写真は、2014 年、無人になった福島町の町や海岸での表現を撮ったものだ。そして再び生徒たちの話し合い。次の

ような感想が出された。「風景に溶け込み、会話している。起こってしまったことにものすごく心を痛めていることが伝わってきた。」 「事故が起こると何が起こるのが伝わってきた。それを留めておかなければならないという次の世代に対する彼女のメッセージだと感じた。」

引率された歴史の先生は語った。「私の父は、米軍の写真班員で上空から広島・長崎の写真を撮り、それを見て私は育った。飛行機からは原爆の図が表わしているような人間に何が起きたかということは見えない。今日原爆の図を見て、自分と原爆と平和とのつながりを改めて考えた。」

最後に、サリヴァンさんは「写真の中に見えなかったものは何か。放射能は見えない。が、ものすごく影響を及ぼす。見えないものが人を傷つけるということを考えながら、核と向き合ってほしい。核兵器と原発は、見えないものと闘いながら、それをどう自分の問題としてとらえ返すかということです。ここから数十 km 先にインディアンポイント原発がある。そのことも考えていこう」と結んだ。

こうして 5 時間に及ぶワークショップは終了。帰り際に山下さんと抱き合って別れを惜しんでいた。



翌日、隣のニュージャージー州の高校生 37 名が来館し、やはり夕方まで話し合った。この取り組みは 11 月以来 7 回実施し、計 250 名が参加している。その子たちが家族に、友達に、「原爆の図」のことを伝えてくれるだろう。2015 年 7 月原爆投下について米国民意識調査では、全体では依然として「正しかった」45%が「間違っていた」29%を上回っているが、18~29 歳では「間違っていた」45%「正しかった」31%と逆転している。このような若者たちがこれからの世界を変えていくことを信じてい

## 国連軍縮関係者・オーストリア大使・反核 NGO の方々も原爆の図を見学

この夜、NGO ヒバクシャ・ストリーズとピースボートの共催、オーストリア、日本、メキシコの国連代表部の後援で「原爆の図」見学会とレセプションが開催され、50名ほどの国連軍縮関係者や NGO メンバーが参加した。ピースボートは 95 か国 424 の NGO からなる核兵器廃絶国際キャンペーン ICAN の中心で、「原爆の図」展賛同団体でもある。



冒頭に山下泰昭さんが核廃絶への

思いを訴えられた。次に日本の赤堀国連公使が「原爆の図は原爆の下で何が起きたか想像する助けになります。これを見た全ての人はその悲惨な現状に驚くに違いありません。その意識を高めることが非人道的な核をなくすことにつながると思います」と挨拶。儀礼的なものとしか感じられなかった。

続いて発言したオーストリアのキッカート大使は「原爆の図はヒロシマ・ナガサキが経験した苦しみをまっすぐ伝える芸術作品。それを見て人々はなぜ核兵器がいるのか、何をすべきかがわかる。人道性に対する被害は繰り返し語られるべきだ。核兵器禁止条約は世界 3 分の 2 以上の賛同を得た。今後国連で決議案を通さねばならないが、保有国が参加していない。この条約を通さなければ将来の世代に地球を残せない。ニューヨークで核兵器廃絶の啓蒙活動を進めねばならない」と語った。被爆国日本が「何をすべきかがわかる」はずなのに、というメッセージを目の前の日本公使に投げかけたのである。この間常にオーストリアの足を引っ張ってきた日本代表はそれをどう聞いたのだろうか。

マークラム国連軍縮上級代表も「原爆の図は被爆の実相を伝える力強いツールである」と語り、メキシコ国連大使は、山下泰昭さんの活動に敬意を表しながら「オーストリア、メキシコ、南アフリカが中心となって核兵器禁止条約の草案を出す」と表明。アメリカの代表的な反核 NGO リーチング・クリティカル・ウィルのアチェソンさんは「原爆の図を見ると、こんな状況にも関わらず核を保有する政府があり核抑止力というが、何から守られるのかと考える。私たちは今、歴史の分かれ道、変えられる瞬間にきている」と語った。最後にパイオニアワークス学芸員のデスポントさんは「被爆の経験がどのように文化的に昇華したのか、見る人の想像力に訴え、そこから何をするのか考えられる」とし、それを「積極的想像力」と表現された。その後原爆の図の前でミニコンサートが行われ、最後に私から、参加へのお礼とこの展示が多く日本の市民の募金によって実現したことを伝えた。

オーストリアは 11 月の国連総会第一委員会に「核兵器を忌むべきものとし、禁止し、廃絶する努力」を求める「核兵器の禁止と廃絶のための『人道の誓約』に関する決議」を提出し、128 カ国の賛同で採択された。だが被爆国としてその先頭に立つべき日本は棄権したのである。メキシコも 2014 年に「核兵器の人道上の影響に関する国際会議」を開催し、「被爆 70 年に核兵器を法的に禁止する外交プロセスを始めるべきで、もはや引き返すことはできない」と総括している。

2016 年からは核兵器禁止条約を巡る新たな闘いが始まる。その時に、その先頭に立つ NGO やオーストリア、メキシコ大使、そして国連軍縮代表らが「原爆の図」を直接見てくださったことの意味は小さくない。この間、国際赤十字やオーストリアなどが、被爆者や科学者の声を聴き、核兵器の非人道性を国際社会に訴えている中で、「原爆の図」はそこにより深い洞察と「積極的想像力」を注ぎ込むに違いない。そしてこの議論の根本に、国家の利益や政策よりも人としての倫理を重んじ、人道に反するものを絶対使うべきではないという理念がある。私たちは、原爆の非人道性を熟知しているはずなのに、「核の傘」の下にいることの矛盾をつきつめてこなかった。核使用禁止条約への日本政府の対応はその矛盾の表れであり、私たち自身の日本での取り組みが問われていると改めて考えさせられた。